

「文末のノ」に関する試案

名嶋義直

0. はじめに

本稿では、文末において終助詞的に使用される「の」を対象とし、ノダが「の」へと「終助詞化」する過程について考察する。但し、本稿の目的は考察視点を示し、その方向の妥当性を示すことであり、その点で試案の域を出ないものである。

本稿は、ノダが「事態の描写」ではなく「聞き手側から見た解釈としての提示」という「解釈めあて」レベルでの機能と、そのような提示を行っていることを聞き手に対し「意図的に、かつ、意図明示的に」伝達するという「聞き手めあて」レベルでの機能とを併せ持つ形式である、と考える。¹ そのため、何らかの要因により「解釈めあて」レベルでの機能を他の形式に委ねる一種の機能分担を行い、「聞き手めあて」レベルでの機能が相対的に前景化した場合、ノダが一種の終助詞的特徴を持つ形式として認識・使用されるようになると考えられる。

1. 先行研究の概観と課題

ノダと終助詞との関連に言及している先行研究には杉本(1990)、田野村(1990)、野田(1993)、松木(1993)、野田(1997)、菊地(2000)等がある。² ここではノダとの関連で考察している田野村(1990)と野田(1993)を併せて取り上げる。

田野村(1990:137-139)は、「文末の『の』」と題して考察を行い、分類を行っている。それをまとめると(1)のようになる。

(1) 田野村(1990:137-139)における「文末の『の』」の分類

¹ 本稿のノダに関する考え方については名嶋(2001a)、(2001b)、(2002)等を参照願いたい。

² ノを完全な終助詞として扱う研究には梅原(1989)、南(1993)等があるが、ノダとの関係を論ずるためこれらには言及しない。

名嶋義直

1. 「～じゃないの」という言い方に現れる「の」
そんなことをしたら危ないじゃないの。
2. 禁止の表現における「の」
同じことを何度も言わないの。
3. 丁寧体の表現に続く「の」
手作りのミートパイですよ。
4. あらたな発見や認識の場合に用いられる「の」
(変なものを見て) 変なの。
なんだ、度胸ないの。
5. その他
太郎のやつ、また、シャツ出してやがんの。
そんなことできないっつうの。
かわいい。動いてんの。

(以上の例文は全て田野村(1990:137-139)から引用)

田野村(1990:137-139)は、1について「いわゆる終助詞の類に属するものと一応は考えてもよい」と述べている。野田(1993)もこの種の「の」をノダとは別扱いにする立場をとっている。2について、田野村は「禁止の『～言わないの』は『～言わないのだ』の文体的な変異形と見てよいのではないかと思われるが、それにしても、『～言わないのだ』『～言わないのです』が禁止の表現として用いられない理由は不明である」(同:52)と述べ、³「問題を含むもの」であると位置づけている。野田(1993:48)はノダとは置き換えられないものの、「肯定の命令の『の』と同じ機能を持っており、同一のものと考えたい」と述べている。但し、禁止文においてノダ形式が用いられない理由に関しては「不明だ」としている。3について、田野村はノダ文の「文体的な変異形と見てよい」と述べている。野田(1993)も同様の立場をとっている。4について田野村は「『のだ』の変異形と考えてよいということにもなるが、結論は下しがたい」と述べている。5については「『のだ』との関係をどう見るべきか不明である」と述べている。4、5のような文については野田(1993)では言及されていない。ただし野田(1997)では、明確には述べてはいないがその

³ この点については「命令のノダ文」との関連で、名古屋大学大学院国際言語文化研究科の小坂光一教授からも指摘を受けた。

記述から推察すると、4のような文を話し手が事態を既定と捉えたり、既定と捉えていることを表す「非関係づけ」のノダと捉えているようである。

文末で用いられるノは、その位置づけが非常に困難であり、ノダとの関連も未だ十分には記述されていない、ということができよう。⁴

2. 終助詞化の過程

2.1. 終助詞化以前のノダ

(2)のように、客体化した話し手自身を聞き手として「解釈としての提示」を行う場合、「聞き手めあて」の機能はそれほど感じられない。

- (2) 彼は或瑣末なことの為に自殺しようと決心した。が、その位のことの為に自殺するのは彼の自尊心には痛手だった。彼はピストルを手にしたまま、傲然とこう独り語を言った。「ナポレオンでも蚤に食われた時は痒いと思ったのに違いないのだ。」

(http://www.math.waseda.ac.jp/~okuda/shuju_no_kotoba/167.html)

その理由は、話し手以外の他者に対する提示の場合とは、伝達態度が異なるからであろう。伝達態度の違いはノダを丁寧形「のです」に置き換えたり「聞き手めあて」の機能を持つ終助詞を後接させると許容度が低下する点からも確かめられる。

- (3) ナポレオンでも蚤に食われた時は痒いと思ったのに違いない [#のです / #のだよ]

一方、話し手とは異なる他者が聞き手として設定されると、ノダは明確に「聞き手めあて」の意味・機能を表すようになる。そのため、終助詞との共起が許容される。また、ノダが丁寧形として実現することも可能である。

⁴ なお、田野村(1990:147-148)では、「雨が降ったの」といった「の」が単独で用いられる言い方を取り上げ、「だ」ではなく女性が用いとされる終助詞「わ」を伴った「だわ」の省略から生じた形式であると述べている。「の」と女性語という問題に関しては、紙幅の都合もあり、本稿では取り上げない。

名嶋義直

- (4) 人間にも言えることだが、長所は見方を変えるだけで短所になる。短所もわかりだ。つまり、言い換えれば、酷評した箇所こそ、その作品の最も優れている箇所なのかもしれないのだ。

(<http://www.ne.jp/asahi/hp/fen/Essay/E084.htm>)

- (5) つまり、言い換えれば、酷評した箇所こそ、その作品の最も優れている箇所なのかもしれない [のだよ / のだね / のです]。

しかし、(4)では「のかもしれない」の使用が、提示している命題が「思考や先行発話の蓋然性という観点からの解釈」であることを示していると考えられる。そのため、「のだ」が更に「聞き手側から見た解釈として提示していること」を伝達する必要はない。したがって、(4)の「のだ」は「意図的に、かつ、意図明示的に聞き手に対して提示する」という機能を前面に出して用いられていると考えられる。

ノカモシレナイが「解釈めあて」で機能し、ノダが「聞き手めあて」で機能するという機能分担が行われているということは、いわば双方が補完しあって1つのノダ形式として機能しているということであり、ノダの「聞き手めあて」の機能だけが独立して機能することはない。そのため、(5)の「のだ」も終助詞として捉えられることはない。

2.2. 終助詞化の過程にあるノダ

(6)のノダも先行発話に対する「聞き手側から見た解釈としての命題」を提示する「解釈めあて」の機能を有している。したがって、終助詞に置き換えにくい。

- (6) もも「あ、紹介しなくちゃ。えっと簾君とミンちゃんです。こちらは向井先生。数学を教えてくれてるの。」

(<http://www.netlaputa.ne.jp/~bigkenta/tbsb.htm>)

- (7) こちらは向井先生。数学を教えてくれてる [#よ / #ね]。

ところが、ノダの中には(8)のように談話の初発で用いられたり、聞き手が容易には検証することができない内容の命題を提示する際に用いられる場合がある。

- (8) でも、私は思うのです。漠然とでも、何かやってみたい、と思うことがあれば、そしてそれが、ちょっとでも心に引っかかっていたら、自然のうちその方向に少しずつ近づいていくものなんだあって。知らず知らずのうち自分で下している、ちょっとした決断が、やりたいことに近づけていってくれてたんじゃないかな、と今はそんな風にも思えるのです。

(<http://www.egroups.co.jp/files/womanjp/vitamin/vitamin15.html>)

このような場合、聞き手は話し手によって「聞き手側から見た解釈として」提示された命題を先行発話や自らの知識と関連づけて「聞き手にとっての解釈として」検証し、その内容と論理性に関しての妥当性を追認することができない。したがって、(極端な場合は何の解釈が分からないまま) そのまま受け入れるしかない。

(8)の「のです」は終助詞に置き換えることが可能であるが、その場合、「聞き手に受け入れを求めている」という伝達態度があるためか、ヨよりも「聞き手との情報の一致を表す」とされる終助詞ネの方が好ましいようである。

- (9) でも、私は思いますね。 - 中略 - と今はそんな風にも思えますね。

このような場合、当該ノダ文が「一方的」、「押しつけ」といったニュアンスで聞き手に解されることがある。それは「ある思考や先行発話」との関連が不明瞭になるにつれ、相対的に「解釈として『受け入れさせる』」という「聞き手めあて」の機能の前景化がより明確に認められるようになるからである、と説明できるであろう。この「聞き手めあて」の機能の前景化が進むとノダの機能が拡張され、「事態」や「話し手の思考そのもの」をノダで提示することができるようになり、より明確に機能の分離が進むことが予想される。

- (10) 瑞穂「でも、給料はちゃんと貰ってるみたいだし...」
郁子「残務整理の間はそりゃ、支払われるでしょうけど、将来はどうなるか分からないじゃないの。」 (春)

(10)の「の」はノダに置き換えることができない。このことは「の」が既に「意図

名嶋義直

的に、かつ、意図明示的に提示する」という機能を失っていることを表している。つまり、終助詞的に用いられるノダは、本来ノダが持つレベルの異なる2機能のうち片方を失うことによって派生したのではないかと考えられる。

(11) 将来はどうなるか分からないじゃない[#のだ / #んです]。

(10)のようなノはノダには置き換えられないが、カに置き換えることができるものであることが田野村(1990:137, 161)で指摘されている。(12)もそうである。

(12) (退院したはずのミツが施設に戻ってきたのを見て)
山形「ミっちゃんじゃないの」 (愛)

一見したところ、(12)はノカに置き換えができそうであるが、しかし、話し手が「聞き手がミっちゃんであるコト」を確信している状況で驚嘆と共に発話している場面であれば、それは不可能になる。

(13) ミっちゃんじゃない[のか / んですか]。(上昇イントネーションで)

(14) ミツ：先生、ミツです。やっぱり帰ってきました。

先生：ミっちゃんじゃない[#のか / #んですか]。
(上昇・下降双方のイントネーションで)

ノダやノカに置き換えられない(10)、(12)の「の」は述語形式から助詞へと移行していることになり、もはや終助詞的に用いられているものと考えられる。

ノダの終助詞化が進行すると、ノが後接する述語が丁寧形をとることが可能となる。これは「聞き手めあて」の機能の一部である「待遇的な聞き手配慮をその述語が表しており、ノが用言としての機能の一部を失いつつあることを意味する。

(15) (節子は大女優であることを隠してお墓を物色している。明日の予定を一平と立てたばかり。そこへ節子のマネージャー松江がやってきて)

松江「明日はどこへも行かせません！」

一平「え？」

節子「明日は学校の創立記念祭がありますの」 (お墓)

終助詞に普通形・丁寧形という形式の分化は存在しない。したがって、(15)の「の」をノダに置き換えることはできない。

(16) 明日は学校の創立記念祭があります [#のだ / #んです]。

しかし(15)の「の」を終助詞であるとは断言できない。(15)は(17)のように言い換えることが可能であり、(17)の異文体であるともみなすこともできるからである。

(17) 松江「明日はどこへも行かせません！」
一平「え？」
節子「明日は学校の創立記念祭があるの / んです」

(15)のような「丁寧形 + ノ」という形式について、田野村(1990:138)は「文体的な変異」である、野田(1993:48)は「文体差を除いては」通常のノダ文と違いはないように思われる、と述べている。野田(1997:28)では「終助詞化してはいるが、『の(だ)』の変異体であり、現れる位置が特殊なものと考え」と述べている。野田(1997:28)は「ますんです」という形は「*ですんです」という形よりは生じやすいが「誤用と考えてよいだろう」と述べている。

しかし、見方を換えれば、このような例はノダが終助詞化していく過程にある姿を表していると考えることができる。「文体選択による聞き手配慮」という「聞き手めあて」の機能を後接する述語に譲り渡しつつある段階であり、まだノダ自身にもその機能が残存している段階であると思なすことができるからである。機能の分化が進めば、より純粋に終助詞的に用いられることになる。実際、「丁寧形 + のです(んです)」という形式は決して誤用ではないと思われる。インターネット検索(検索エンジンはgooを使用)では以下のような実例が見つかった。筆者の語感では違和感を感じるものの、完全な誤用とは言えないように思える。

(18) 生活雑貨エゼ(楽しい暮らしを演出する、やさしい雑貨をご提案。)
妻のコメント・・・こちらを担当しておりますんです。わたくし。
(<http://www.captain.co.jp/hiroshi/Hiroshi.html>)

この種の文に関連して、野田(1997:28)は「『の(だ)』が用いられない文脈では『で

名嶋義直

すの』『ますの』も現れない」と述べているが、(19)のような、「の」をノダに置き換えることも不可能であり、文自体をノダ文に置き換えることも不可能である文が存在する。これらは、先に田野村(1990)の指摘と共に述べたように、ノをカに置き換えることができるものである。したがって、そのような「の」は(15)のようにノダ文の変化したものと異なるレベルにあるものと考えられる。

- (19) 節子「失礼ではありません。事実なので。あなたのしていらっしゃることが失礼です。お金が切れたら追い出そうなんて、それではまるで、お墓ではなくて、安ホテルではございませんの！」 (お墓)
- (20) お金が切れたら追い出そうなんて、それではまるで、お墓ではなくて、安ホテルではない[#のだ(んです) / #のですか / ですか]!
- (21) あなた来てくださる?でもぜひ聞いていただかなければならない事があるんですから.....よくって?そうぜひどうぞ。明々後日の朝? ありがとうきっとお待ち申していますからぜひですのよ」
(<http://www.aozora.gr.jp/cards/arishima/htmlfiles/aruonna2.html>)
- (22) #きっとお待ち申していますからぜひなんですよ

以上の考察から、文末で用いられるノの中にも、ノダの機能を残存させているものから、ノダの持つ用言としての機能を後接する形式に委譲し終助詞の領域にずれ込んでいると言ってよさそうなものまで、段階差が存在することが確かめられた。

2.3. ノダに後接するノ

更に終助詞化が進行すると、田野村(1990:142 注2)や野田(1997:28)が指摘しているようにノがノダに対しても後接するようになる。

- (23) 「あとう加藤さんところの奥さんは、やきもちやきですわね。さっきあそこ旦那さんのお出かけのとき、一寸旦那さんに物を云いましたら、奥さんがじろっとあたしを睨むんですのよ」
(<http://www.aozora.gr.jp/cards/yokomitsu/htmlfiles/suiren.html>)

(24) (教師としての採用面接で)

「あなたに家庭がやれますか。」

「私家庭が大好きなんですの。」

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/tokudasyusei/files/kasoujinbutsu.html>)

但し、このような文を田野村(1990:142 注2)は『「～のであるのである」式の冗語的な表現と見てよいのではないかと述べ、通常のノダ文の文体的な変異体と見ている。一方、野田(1997:28)は、ノをノダに置き換えて「～んですんす」とすると不自然であることを根拠とし、このようなノはノダとは「多少異なるもの、つまり、終助詞化のさらに進んだもの」と考えるべきだろう」と述べている。どちらの主張にも一理あるように思われる。⁵

本稿ではその許容度が低下する原因が「んです」が丁寧形「んです」に後接している点にあると考える。丁寧形で実現しているということは、待遇的な聞き手配慮という「聞き手めあて」の機能が働いていることが形態的に明示されている。そのような「んです」に更に「んです」が後接することは、「聞き手めあて」の機能が重複・衝突することになり、その結果許容度が低下するものと思われる。一方、同種の反復形式である「～のであるのである」文の許容度が低下しないのは「～のであるのである」の場合、前の「のである」が普通形であるという点、後に「のである」が位置するという点から、前の「のである」が「解釈めあて」レベルで機能し、後の「のである」が「聞き手めあて」レベルで機能する⁶と考えることが可能となるからである。これは「のですのだ」という形式は許容されないが、それに比べると「のであるのです」、「のであるのであります」という形式の許容度が高くなる点からも裏づけられる。⁷

⁵ その位置づけだけに関して言えば、本稿の考え方は野田(1997)に近いが、以下の点で考え方を異にする。野田(1997:29)は、「『の(だ)』も本来の意味が薄れて、軽く多用されることがある。『の』という形になると本来の意味から離れやすくなり、やわらかなニュアンスだけが特に意識され、『です』『ます』、さらには『のです』に後接して用いられることになるのであろう」と述べている。しかし、この考え方は逆であろう。「『の』という形になると本来の意味から離れやすくなるのではなく、「本来の意味から離れたために『の』という形になる」と考えるべきである。更に言えば、「本来の意味から離れるのではなく、「本来の意味を機能分担する」と考えるべきである。また、野田(1997)は、なぜ「～んですんす」という形式が不自然になるかを述べてはいない。

⁶ 丁寧形を選択しないということも「聞き手めあて」の伝達態度を表すことに注意されたい。

この考え方は「んですの」という形式の「の」が「のだ」や「のです」ではなく、ノダが終助詞化したものとみなす1つの根拠ともなる。「んですの」の「の」が「のだ」や「のです」であれば、機能の重複・衝突を引き起こし、許容されなくなるはずだからである。「んですの」という形式の存在は、ノダから生じた「の」が、完全にノダの機能を失い、終助詞化していることを表していると言えよう。

このことは母語話者の直観からみても「の(ん)だの」という形式は存在しないように思われるが、「の(ん)ですの」という形式は容易にその存在を予想できること、また、実際にその実例を見つけることができるという点から裏づけられる。

ノダにノが後接した場合、先の「のであるのである」の場合と同様、前に位置するノダが「解釈めあて」機能を担い、後ろに位置するノが「聞き手めあて」機能を担っていると想定することが最も合理的である。しかし、後ろのノにはダが存在しない。⁷ 構文論的に言えば、体言化・名詞相当句化され1つの叙述としてまとめられてはいるが、陳述機能を持つには至っていない、ということである。ここで聞き手がとる発話解釈の方策は、非文法的表現と見なすか、先の機能分担想定を修正し、前に位置するノダが2機能を担っており、後ろのノを終助詞と見なすという新たな想定を立てるか、のいずれかである。しかし、前に位置するノダが普通形の場合、提示という陳述機能を担っているかどうかをその形態から確かめることはできない。そのため、「の(ん)だの」という形式は許容度が低下するものと思われる。

一方、「の(ん)ですの」という形式の場合、機能分担が行われていると想定する

⁷ 但し、「のだ」と「のである」を、単なる文体の相違による異形態であって基本的には同一の意味である、とみなすことには問題があるかもしれない。それは「のだ」が「の+だ」という構造であるのに対し、「のである」は「の+で(『だ』の連用形)+ある」という構造であるからである。この構造の違いが意味の違いに反映されていると予想することは自然であろう。実際、「行くのだのだ」、「行くのなのだ」は非文と判断されるが、「行くのであるのだ」であれば、許容度が上がり、「行くのであるのである」は更に許容度が上がる。他にも「のだ」文としては許容できないが、「のである」文であれば許容できる場合もあると思われる。「のであるのだ」が許容されやすいのは、「のである」が「ので」に「だ」ではなく「ある」が後接していることと関係があるかもしれないが、本稿ではこれ以上詳しく論ずる用意がない。その指摘に留め今後の課題としたい。

⁸ ノが用いられにくい場合については、野田(1993:45)で、独話における場合と、「あの人、来ないね。きっと忙しいの」のような「発話時の話し手の判断を述べている場合」とが取り上げられている。これは本稿で言う「発見のノダ」に該当するものであり、ある「解釈」を「話し手の思考」に位置づける段階で発話されるものである。したがって、陳述機能を担うダを脱落させることはできない、ということの説明ができる。

点は同じであるが、前に位置する形式が丁寧形であるため、「聞き手めあて」レベルの機能を担っていることが形態的に明白である。前に位置する形式が、併せ持つ2機能の内の高次レベルの機能を有するということは低次の「解釈めあて」の機能をもちっていると想定できる。したがって、聞き手は後ろの「の」が提示段階の更に高次のレベル、つまり、「提示の態度（伝達態度）のみを示す」というレベルで機能していると想定することになる。そして、「の」は終助詞的な形式として認識されることになる。

これに関連して、田野村(1990)の考えでは「～なのである」という形式がなぜ生じうるのかについて説明が困難であると思われる点に触れておきたい。田野村(1990)の、ノダが「背後の事情」や「ある事情」を述べる形式であるという考えに立つと、「なのである」という形式は「『背後の事情』の『背後の事情』」や「『ある事情』の『ある事情』」等を述べる形式であるということになる。そのように考えると、2つの問題が生じる。1つは「なのである」は許容され、「んですんです」や「んですのだ」といった「丁寧形 + 丁寧形（または普通形）」という連鎖形式は許容されない事実を説明できない、という点である。また、「なのである」を冗長な繰り返し表現と見ることは、更にノダを後接させて「『背後の事情』の『背後の事情』の『背後の事情』」を述べる形式を作り出すことを（積極的ではないにしろ）認めることになるという点も問題となる。「ある事情」を述べる場合も組み合わせれば無限にノダを後接させて無限の組み合わせを生成し、理論上、無限の意味のノダ文を生み出すことが可能となるからである。

一方、本稿の考え方に立てば、先に述べたように、「なのである」より「のですのだ」の方が許容度が低いといった文体差に起因すると思われる現象を説明できる。また、「なのである」は許容できても「なのであるなのである」は許容されないことを説明することが可能となる。第1の「なのである」が「解釈めあて」レベル、第2の「なのである」が「聞き手めあて」レベルで機能すると見なして機能分担を想定することは可能であるが、第3の「なのである」においてはいずれの機能レベルを想定しても重複・衝突が生じることになるからである。したがって、同一形式のノダ形式は2連鎖に限界である、という歯止めを設定することが可能となる。このことは同一形式による連鎖でなければ、機能分担を想定することができ、3連鎖以上も可能であることを意味する。それゆえ、この考えに立てば、逸脱しているとは思われるものの、現実に存在し得る可能性を完全には否定できない

名嶋義直

(26)のようなノダ文を説明することが可能となる。(26)は実例(25)を変化させたものである。

- (25) 鋭い悲哀を和らげ、ほかほかと心を怡しませます快感は、同時に重々苦しい不快感である。この不快感は日光浴の済んだあとなんとも言えない虚無的な疲れで病人を打ち敗かしてしまう。おそらくそれへの嫌悪から私のそうした憎悪も胚胎したのかもしれないのである。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/kajii/htmlfiles/huyunohae.html>)

- (26) おそらくそれへの嫌悪から私のそうした憎悪も胚胎したのかもしれないのに違いないのである。

ここまでの考察をまとめると、「ノダに置き換えることができない文末ノはノダが終助詞化した形式である」ということになる。野田(1993:49)も「あえて、終助詞化しているかどうかの線をひくならば、『のです』の後ろの『の』のみを、終助詞化したものとみなしたい」と述べている。

3. 終助詞化したノダの意味・機能

2. 2~3 で述べたように、終助詞化したノダが、全て一様のレベルで終助詞化しているわけではない。終助詞化したノダの終助詞化の程度は大きく2段階に分けることが可能である。1つは、他の終助詞との意味・機能の分化がさほど進んでいないと考えられる段階である。したがって、この段階における「の」は他の終助詞と置き換えることができる。そして、その意味も(判断には個人差もあろうが)それほど変化しないと考えられる。まず、「か」に置き換えられる例である。

- (27) 「あなた坂本まで帰るんですの」と千枝子は婆さんに訊ねた。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/yokomitsu/htmlfiles/hiei.html>)

- (28) あなた坂本まで帰るんですか

次は「よ」に置き換えられる例である。

- (29) 「や、これは、どこかへお出かけ？」

「いいんですの、かまいません。ウメちゃん、すみません客間の雨戸をあけて。どうぞ、先生、おあがりになって。かまわないんですの。」

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/dazai/htmlfiles/kyououfujin.html>)

- (30) いいんですよ、かまいません。ウメちゃん、すみません客間の雨戸をあけて。どうぞ、先生、おあがりになって。かまわないんですよ。

「よ」、「ね」、「よね」のいずれにも置き換えることが可能な例もある。

- (31) 「何ですか来てほしいようなことを言うんですの。それでお手紙差し上げましたの。」

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/tokudasyusei/files/shukuzu.html>)

- (32) 何ですか来てほしいようなことを言うんです [よ / ね / よね]。

一方、他の終助詞に置き換えることが不可能なものは次のような例である。筆者が収集した例では、1例を除き、他は全て「のよ」という形式で用いられている。

- (33) その名の通り、中国大陸や台湾でとれたお茶の総称ですわね。中国では学術名『カメリア＝シネンシス（中国種椿）』のみを「お茶の樹」として、これから取れた葉のみを「お茶」としているんですのよ。

(<http://isweb6.infoseek.co.jp/family/shinomi/qa/qa.html>)

- (34) 中国では学術名『カメリア＝シネンシス（中国種椿）』のみを「お茶の樹」として、これから取れた葉のみを「お茶」としているんです [#か / #よ / #ね / #よね]よ。

他の終助詞に置き換えできない理由は次の3つである可能性が考えられる。

- a: 終助詞のノではなく、ノダであるため。
- b: 「のよ」（または「のね」）で一形式であり、他の終助詞と範列的關係を形成しているため。
- c: 他の終助詞とは異なる独自の意味・機能を持ち、他の終助詞との間に範列的關係を、かつ、前後の語との間に統合的關係を形成しているため。

名嶋義直

aの可能性は非常に低い。(33)の「の」はノダ文(更に言えば、丁寧形「んです」)に後接しており、通常のノダの変異形であるとは考えにくいからである。bの可能性も低いと思われる。確かに「よ」の前に位置することによって、他の終助詞との置き換えが妨げられると考え、それゆえ「の」と「よ」が一体化していると考えことは可能である。しかし、「のよ」から「よ」を取り除いても許容され、かつ、その意味も変化する。したがって、「の」と「よ」とは一体化するには至っておらず、両者の機能も分化しているものと考えられる。⁹

(35) 「まあひどいこの炭は、水をかけずに持って来たと見えるのね。¹⁰ 女ばかりの世帯だと思って出入りの御用聞きまで人をばかにするんですよ」

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/arishima/htmlfiles/aruonna2.html>)

(36) 女ばかりの世帯だと思って出入りの御用聞きまで人をばかにするんですの。

最もその可能性が高いのはcであり、「の」という形式で用いられる終助詞化したノダは、それ独自の意味・機能を持ち、他の終助詞と範列的關係を構成し、かつ、前後の語と統合的關係を形成している、と考えることができる。

「の」に独自に備わってる意味・機能とは何であろうか。ここでヒントとなるのがノダの持つ本質的機能と、「よ」との共起關係が多いという事実の2点である。ノダが終助詞化の過程を辿り、それ独自の意味・機能を持つに至ったとしても、その独自の意味・機能形成過程において、ノダ本来の本質的機能が大きく影響していると考えことは自然なことである。ノダに独自の機能を一言で言えば「聞き手

⁹ ノと終助詞との複合形について考察をしている松木(1993:62)は、「『の』と終助詞の複合形の意味・機能の大部分は、基本的には構成要素の合計、つまり『結合』で処理できそうである」と述べている。ただし、「のよ」、「のね」、「のさ」、「のか」などの一部には「結合だけでは説明しにくい意味が生じている」し、「のよね」「のかね」のような2つ以上の終助詞がノに後接する場合においては「余計に個々の構成要素の意味を取り出しにくくなる」と述べている。但し、松木(1993)は「んですよ」のようなノダに後接するノについては全く取り上げていない。

¹⁰ この例が「のね」という形式で用いられている例である。しかし、筆者の判断では許容度が低い。それは後ろの「んですの」とは異なり「の」が非ノダ文に用いられているため、表面上はノダ文のような体裁を備えてしまい、したがって、通常のノダとして捉えられることになり、そのため、炭を見て「その状況を描写する」場面において、聞き手に余計な関連性の見込みを伝達してしまっているためであろう。

側から見た解釈としての提示」と「意図的に、かつ、意図明示的に提示する」という機能である。ノダが終助詞化の過程で「解釈めあて」の機能を他形式に担わせることで機能分担を行うことは既に見た通りであるが、「聞き手側から見た解釈としての提示」という機能は終助詞化が進行しても潜在的に存在し続けていると考えられる。

この「聞き手側から見た解釈としての提示」という意味・機能は「よ」にはないものである。したがって、「の」を取り除くとその発話の意味は、微妙ではあるが、変化する。

(37) 女ばかりの世帯だと思って出入りの御用聞きまで人をばかにするんです。

この「よ」との共起という事実から考えられるのは、「の」は「よ」とは異なる話し手の伝達態度を表しているのではないか、ということである。話し手と聞き手の「情報の不一致」や「ギャップ」を表すとされる「よ」に対し、「の」は「伝達対象としての聞き手への心情的態度」とでも言うべき側面を表しているように思われる。「ある解釈」を「聞き手側から見た解釈として」「意図的に、かつ、意図明示的に聞き手に提示する」という実質的な機能をほとんど失ったことによって、「の」は、ノダが派生的に生じさせる情意的な伝達の機能を唯一の意味・機能として有することになったと考えられる。「聞き手側から見た解釈として」「意図的に、かつ、意図明示的に提示する」ことは、提示する「解釈」が「聞き手にとって」唯一妥当なものであると話し手が見なしている態度を伝達する。そのことは結果的に「分からせよう」という態度を聞き手に伝達することになる。更に、そのような態度は事実や思考の一方的提示とは異なり、「解釈を共有しよう／させよう」という話し手の態度を聞き手に推意させることにもなる。そのため、ノダの使用は結果的に、時として「やわらげ」や「押しつけがましさ」を聞き手に感じさせる。

他の終助詞に置き換えられる場合は、「の」が聞き手に対する伝達態度を表すという、他の終助詞と共通する機能を有しているものの、未だ「の」独自の意味・機能が他の終助詞とが完全に分化していないことを意味すると考えられる。そのため、「か」、「よ」、「ね」等に置き換えても、多少の意味の変化は生じるが、文の許容性には問題がない。一方、他の終助詞に置き換えできない場合は、「よ」との共起関係が示すように、「の」がそれ自体で独立した意味・機能で用いられ、その前

名嶋義直

後の形式と統合的な関係にあることを意味する。したがって、「の」を取り除くことはできても、置き換えることによって統合的關係が崩れる場合は、置き換えが許容されないことになる。このことは「の」を取り除けば、「か」、「よ」、「ね」、「よね」の如何なる形式でも許容されることから確かめられる。

- (38) 中国では学術名『カメラリア=シネンシス(中国種椿)』のみを「お茶の樹」としていて、これから取れた葉のみを「お茶」としているんです[か/よ/ね/よね]。

収集した用例を見ると、他の終助詞に置き換えられるもの27例に対し、置き換えられないものは7例(うち1例は置き換え以前において例文自体の許容性に問題あり)であった。更に多くの用例を集める必要があるが、コーパスを利用した検索結果という点の妥当性も考慮すれば、ノダの終助詞化が今まさに進行中であることを意味している、と考えられる。

なお、ノダが間投助詞的に用いられることある。このような特徴については杉本(1990)、野田(1997)、菊地(2000)でも触れられている。(39)のような例である。

- (39) (高校生の時のできごとを語り出した)
愛子「(与志にくるまれ)...高校生の時だった。学校をズル休みして図書館で本を読んだの」
与志「うん」
愛子「そしたら、同じようにズル休みしていた別のクラスの男の子がいて、ドーナツでも食いに行こうって誘われたの。学校を出たところを近所の人に見られて、その人が父に喋ったの。 以下省略
(私)

菊地(2000:48注15)では、「きょう近くで火事があったの(よ)/あったんだ(よ)」のような例を出し、「一種の心情的な共有感を志向する やわらげ 的な、終助詞に近い用法と見るべきかと思われる」と述べているが、「んだ」、「んです」に置き換えられる点、しかし、終助詞に置き換えられない点等から見て、終助詞化しているとは言えない。その「の」は通常のノダとして考察すべきである。

4. その他の「文末のノ」の位置づけ

4.1. 禁止表現におけるノ

田野村(1990:137-139)は禁止表現におけるノについて、「禁止の『～言わないの』は『～言わないのだ』の文体的な変異形と見てよいのではないかと思われるが、それにしても、『～言わないのだ』『～言わないのです』が禁止の表現として用いられない理由は不明である」(同:52)と述べている。本稿も文末に「の」をとる禁止の表現を基本的にはノダ文であるとみなす。このことは、ノダの「ある思考は先行発話の解釈」を「聞き手側から見た解釈として」提示する、という機能から裏づけられる。(40)をもとに(41)のような次のような会話が想定できるからである。

- (40) (鳥の数え方を子供に教えている)
瑞穂「二匹って言わないの。二羽って言うのよ」 (春)
- (41) 瑞穂「二匹って言わないの。二羽って言うのよ」
息子「へえ。鳥は二匹って言わないんだ。二羽って言うんだ」

禁止の場合に限ってノダではなく「の」が用いられる理由は、通史的考察を行っていない本稿で確かなことを述べることはできないが、おそらく「禁止」という発語内行為の性格に起因するものではないか、と考えられる。

ある行為を禁止するということは、その行為が少なくとも話し手、または聞き手(もしくはその双方)にとって「好ましくない結果」をもたらすものであることを意味する。特に発話時において聞き手がそのような行為を行っている場合、早くその行為を中止させることが望ましい。

- (42) (杉山はダンスを習っている。おずおずと踊る杉山に教師が)
舞：遠慮しないの。 (ダンス)

そのような禁止文に求められることは、聞き手が取るべき行動を示すことである。一方、ノダは「ある思考や先行発話の解釈」を提示する機能を持つ。したがって、聞き手は提示された命題を「聞き手側から見た解釈として」発話解釈する。

名嶋義直

- (43) (杉山はダンスを習っている。おずおずと踊る杉山に教師が)
舞：遠慮しないんです。

更に言えば、「の」を用いない(44)はそれ以上に直接的で禁止度が高い。

- (44) (杉山はダンスを習っている。おずおずと踊る杉山に教師が)
舞：遠慮しない。

以上から判断して、「禁止」という発語内行為を遂行し成功させるためには、ノダの使用は聞き手の関連性を引き下げるという点においてやや問題があると考えられる。したがって、ノダの「聞き手めあて」機能だけが前景化し、共時的には「～の」という形式で用いられているものと考えられる。¹¹ このように考えれば「少し遠い将来における行動をあらかじめ防ぐような種類の禁止」(田野村(1990:52))の場合に「のだよ」等の形式でノダが用いられることになる、という点も説明できる。この場合は「聞き手が、ある時において、ある場所で、ある行動をとっていけない」という話し手の思考を聞き手に「解釈」させるための発話であるため、ノダを用いた方が「ある思考や先行発話」の「聞き手側から見た解釈として」提示されていることが明示される。よって「だ」が表面化するものと思われる。¹²

4.2. 新たな発見や認識に際して用いられるノ

- (45) (変なものを見て)変なの。
(46) なんだ、度胸ないの。 (以上、田野村(1990:139))

上のような文について田野村(1990:137-139)は、「すてきでしょう？これ象牙なのよ。 - わあ、いいんだ(あ)」のようなノダ文との関連から「『のだ』の変異形と考えてよいということにもなるが、結論は下しがたい」と述べている。田野村(1990)

¹¹ 男性の場合は「の」を用いない発話を行い、女性の場合は「の」を用いる発話を行うことが多いように思われるが、それは「の」の持つ情意性に訴える割合が女性の場合に多いからではないだろうか。

¹² なお、野田(1993:48)は禁止の「ないの」に関連して「騒ぐんじやないの」という例文を挙げ「この『の』については保留とする」と述べているが、これは先に述べた機能分担で説明できる。

の、ノダは「背後の事情」や「ある実情」を提示する、という枠組みでは「(変なものを見て)変なの」「なんだ、度胸ないの」といった文をノダ文として説明することが困難であり、そのため「結論は下しがたい」と述べることになったのであろうと思われる。

これらの文を「発見のノダ文」との関連で考えれば、問題は解決する。(45)は(47)のような発話であると考えることができる。(46)に関しては「聞き手の思考や先行発話」を「解釈」し、その「解釈」を自らの思考に登録させる「発見のノダ文」と見なすことができる。(45)、(46)の「の」は丁寧形に置き換えることができないという点でも「発見のノダ」と共通の特徴を持つ。

- (47) (買い物に行って。安いと思っていた商品が結構高価なのを見て)
うわっ、高いんだ。
(48) A: やっぱり止める。怖いよ。
B: なんだ、度胸ないんだ。

但し、両者には微妙な違いがあるように感じられる。この違いは、「んだ」の場合は下降イントネーションで発話されるが、「の」の場合は上昇イントネーションで発話される、という点に現れていると言える。田野村(1990:139)もこのイントネーションの違いと「しばしば延長を伴う」長音化が生じる点を指摘し、「見いちゃった。いけないんだ(あ)」のようなノダ文においても上昇イントネーションと「延長」が見られる点を挙げ、ノダ文との関連を示唆している。

「延長」については一種の「驚嘆」的な命題態度の現れであると考えられる。この特徴は、文末のノが「発見のノダ」と基本的な点で共通することを示している。「発見のノダ文」もしばしば「驚嘆」的な命題態度でもって発話されるからである。音調が発話者の心的態度の表現であるとするれば、同様の音調を伴うということは両者が共通する状況で用いられる文形式である可能性を示していると言えよう。

但し、本稿が目指したいのは、(45)、(46)の「の」が常に上昇調で発話される、という事実である。それは「だ」という述語形式を失った「の」が聞き手(客体化された話し手)に対する提示機能を担うためイントネーションが有標化したからである、と考えられる。¹³ 更に言えば、形容詞を述語とする状態性命題を提示してい

¹³ 梅原(1989:321-322)はノを終助詞と位置づけ、「『の』」は、イントネーションなしでも何ら

名嶋義直

ることが、影響していると言えよう。田野村(1990:138-139)で提出している文は「変だ」、「度胸がない」、「かわいくない」という状態性述語に「の」が後接している例である。通常のノダ文において名詞文や形容詞文といった状態性述語文はノダの使用が任意である場合が多い、という指摘がなされている(例えば菊地(2000:44注8))。したがって、形容詞文においては、動詞文の場合に比べて、「だ」が脱落した文末の「の」がノダの機能を保持し続ける必要性が乏しく、その結果、終助詞化が進んだものと考えられる。

この「の」のイントネーションにおける特徴は、終助詞「よ」、「ね」が「雨が降っているよ/ね」という最もプロトタイプ的な用法で用いられる場合のイントネーションの特徴と一致する。この場合も「降っている」は事態の描写こそ行えども、聞き手に対する提示機能は有せず、それは終助詞が担っている、と考えられる。つまり、終助詞と共通の特徴を有していることになる。以上から、本稿は、(45)、(46)の「の」を「発見のノダ文」の「の」が終助詞化したものとする。¹⁴

4.3. 位置づけ保留のノ

最後に田野村(1990:139)が「『のだ』との関係をどう見るべきか不明である」と述べている文末が「の」で終わる例を取り上げる。

かの表現を構成しうるものではあるが、どんな種類の表現を構成するかは、一定のイントネーションを伴って初めて決定される。その意味では、文表現の種類を決定しているのはイントネーションであって、『のだ』はその前の段階までの機能しか持たないとも言うべきと述べている。例として挙げているのは以下の例文である。

午後は買い物に行くの。(下降調イントネーション・意志)
午後は買い物に行くの?(上昇調イントネーション・疑問)
午後は買い物に行くの!(強調プロミネンス・命令)(以上3例文、同:321)

但し、「の」を取り除いた場合でも同様のイントネーションの関与が認められる点、例に挙げている文末の「の」は全てノダに置き換えられるものである点からみて、梅原(1989:321-322)の記述は「終助詞」ノの意味・機能にイントネーションが関与する事実を説明しているとは言えない。

¹⁴ この表現は男性でも使用することができる。その理由については一応次のように想定できる。この「の」は、田野村(1990)の指摘のように一種独特のイントネーションを伴うことが多いため、女性語的特徴を持っている(と見られる)終助詞化したノダの「の」とは区別されており、そのため男性でも使用できるのではないだろうか、と考えられる。

- (49) 「太郎のやつ、また、シャツ出してやがんの。」
(50) 「そんなことできないつつの。」
(51) 「かわいい。動いてんの。」 (以上、田野村(1990:139))

ここで注目したいのは「の」がノダに置き換えることができるという点である。

- (52) 太郎のやつ、また、シャツ出してやがる [んだ / んです]
(53) そんなことできないつつ [んだ / んです]
(54) かわいい。動いてる [んだ / んです]

また、「かわいい」という先行発話が存在している(51)にも注目したい。(49)にも(55)のように先行発話の存在を想定することができる。(52)と類似する実例も存在する。以上から、これらは通常のノダ文と同じ機能で発話されていることになる。

- (55) だらしないなあ。太郎のやつ、また、シャツ出してやがんの。
(56) 女B：冗談じゃないわ、あなたが消えるつつの！
(<http://www.nishitetsu.co.jp/nnr/inf/drama/oa010217.htm>)

また、これら文末の「の」を上昇調で発話すると、許容度が低下する。

- (57) #太郎のやつ、また、シャツ出してやがんの。(上昇調で)
(58) #そんなことできないつつの。(上昇調で)
(59) #かわいい。動いてんの。(上昇調で)

したがって、終助詞的音調を有していないという点から、先に取り上げた「変なの」「なんだ、度胸ないの」に比べれば、その終助詞化の程度は相対的に低い、と判断し、本稿はこれらの文末の「の」文をノダ文として位置づけることにする。¹⁵

¹⁵ イントネーション等の音声的な特徴は同一の言語形式からなる発話であっても発話状況如何で変化することが考えられるし、その特徴がどの程度有意なものかということも変化すると思われる。しかし、田野村(1990)が(49)~(51)をどのような状況で発話されたものとみなして論じているかは明確ではない(同じことが(45)、(46)に関してとも言える)。したがって、本稿も一般的であると思われるある特定の状況を設定して感覚的に判断しているに過

5. まとめ

本稿ではノダが終助詞へと連続する過程を考察した。そして、その現象が、ノダの機能を「ある思考や先行発話の解釈」を「聞き手側から見た解釈として」「意図的、かつ、意図明示的に」「聞き手に対して提示する」ことであるとする筆者のこれまでの主張と、ノダにおける「機能分担」という観点から説明可能であることを示した。また、先行研究でその位置づけを保留された、その他の文末の「の」について、本稿の考え方に基づく位置づけを行った。その点で、ノダの終助詞化の過程をノダの本質的機能と機能分担という観点から説明を試み、その方向を示す、という当初の目的は達成できたと考えられる。但し、本稿での考察は、やや思索的であり、更なる考察と検証が必要である点は否めない。今後の課題としたい。

参考文献

- 梅原恭則(1988)「助詞の構文的機能」,『講座日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体(上)』,明治書院,pp.302-326.
- 菊地康人(2000)「『のだ(んです)』の本質」,『東京大学留学生センター紀要』10,東京大学留学生センター,pp.25-51.
- 杉本和之(1990)「『のだ』の種々相」,『中京国文学』9,中京国文学会,pp.72-86.
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法。』,和泉書院.
- 名嶋義直(2001a)「ノダ文の提示するもの - 『解釈』という観点から」,『ことばの科学』14,名古屋大学言語文化部 言語文化研究会,pp.71-92.
- 名嶋義直(2001b)「『発見のノダ』再考」,『語用論研究』3,日本語用論学会,pp.1-15.
- 名嶋義直(2002)「『説明のノダ』再考 - 因果関係を中心に -」,『日本語文法』2-1,日本語文法学会,pp.66-88.

ぎないことを断っておく。

野田春美(1993)『『のだ』と終助詞『の』の境界をめぐって』、『日本語学』12-11, 明治書院, pp.43-50.

野田春美(1997)『の(だ)の機能』, くろしお出版.

松木正恵(1993)『『の』と終助詞の複合形をめぐって』、『日本語学』12-11, 明治書院, pp.51-64.

南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』, 大修館書店.

出典

春:「あ、春」/愛:「愛する」/お墓:「お墓がない!」/私:「私たちが好きだったこと」/ダンス:「shall we ダンス?」. 以上『シナリオ』55-1 / 53-10 / 54-3 / 53-10 / 52-2, シナリオ作家協会, より.

